

# 主体的な読み手を育てる国語の授業の在り方

—— 「読むこと」の系統的な指導を通して ——

赤羽裕子<sup>1</sup>

小学校国語科の学習指導要領解説では、「読書活動の充実」が改訂の要点に挙げられている。朝読書などの取組は各学校で定着しつつあるが、国語の授業での読書指導については改善の余地があると考えている。そこで本研究では、実態調査から授業改善の視点を見だし、「読むこと」の学習における『読書のよさ』『本を読む力』『交流』を重視した授業の工夫と教材開発を通して、主体的な読み手を育てる授業の在り方を探った。

## はじめに

読書は、自分の日常生活では体験できない暮らしや出来事に出会ったり、様々な生き方等を知ったりすることができ、人間形成に欠かせないものである。またテレビやインターネット等、多種多様な情報があふれる現代社会では、自らの目的に応じて情報を選び取り、活用できる主体的な姿勢が求められている。

平成25年5月の「第3次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（文部科学省 2013）には、「子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないもの」とある。「読書離れ」「活字離れ」が指摘されて久しいが、児童の生涯にわたる読書習慣の形成には、家庭・地域はもちろん、学校での取組の強化が必要である。

## 研究の内容

### 1 研究の目的

小学校学習指導要領解説国語編（平成20年8月）（以下、「解説国語編」）によれば、「C読むこと」の目標は、読む能力と読書態度から構成されている。また「『C読むこと』の指導では、児童の読書意欲を高め、日常生活においても読書活動を活発に行うように促し、児童の読書力を向上させることが重要」（p. 104）とあり、読書指導は「読むこと」の指導の重要な位置を占めている。読書力の向上には、基礎となる読む能力の習得が必要であり、さらに杉本（2010）が「読書の意義を実感させ、そのよさを知らせることが第一」（p. 1）と述べるように、「読書は楽しい」「読書は役に立つ」と実感する経験を積み重ねることが「読むこと」の学習に求められているのである。

本研究では、読書の意義やよさを実感させ、読書意欲を高めることを目指して研究を進めることとした。

1 二宮町立二宮小学校

研究分野（授業改善推進研究 国語）

## 2 テーマ設定の理由

読書意欲を高めるためには、国語の授業での学びと読書のつながりを効果的に持たせることが必要と考え、テーマを設定した。

### (1) 主体的な読み手とは

解説国語編、「C読むこと」の指導計画作成上の配慮事項には「読書の指導では、読み手としての主体性を育てること、目的をもち意欲的に読書をする態度を育てること、読書をする喜びが分かり進んで読もうとすることなどを通して読書意欲を高めることを重視する」（p. 104）とある。

「読み手としての主体性」とは、読んだものを評価したり、客観的・主観的の両面から判断・選択したり情報や内容を得ることのできる態度と考える。「目的をもち意欲的に読書をする態度」とは、楽しむために読む、知識を得るために読む等、日常生活につなげて読むことのできる態度と考える。「読書をする喜びが分かり進んで読もうとすること」とは、読書行為を自発的にし、進んで本を手取る態度と考える。

これら3つを、「主体的な読み手」の態度と捉えた。

### (2) 小中の系統性を見て

第1図は、小学校・中学校の国語科「C読むこと」の目標の中から読書態度に関する目標を取り出したものである。まずは楽しむことから始まり、幅広い読書から物事を吸収・思考し、自己を耕し成長のきっかけとなるよう、段階を踏んだ目標の系統性が見られる。各学年の指導は、前後の学年の目標とのつながりを意識して指導することが大切である。それにより子どもは学習の連続性を感じ、教師にとっても目指すべき子どもの姿の把握につながると考える。

校種	学年	目 標
小	1・2	楽しんで読書しようとする
小	3・4	幅広く読書しようとする
小	5・6	読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする
中	1	読書を通してものの見方を広げようとする
中	2	読書を生活に役立てようとする
中	3	読書を通して自己を向上させようとする

第1図 国語科「C読むこと」に関する目標の中の読書態度に関する目標

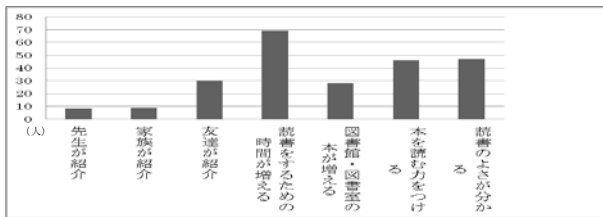
### (3) 目指す子どもの姿

本研究では、小学校の学習のまとめと、中学校への系統性を意識し、第6学年を対象とした。第6学年の目指す子どもの姿を、次の3つの姿とした。

- ・自ら判断して、作品や内容を読む姿
- ・自らの生活に読書を取り入れて読む姿
- ・自ら進んで本を手に取り、読む姿

### 3 実態調査から

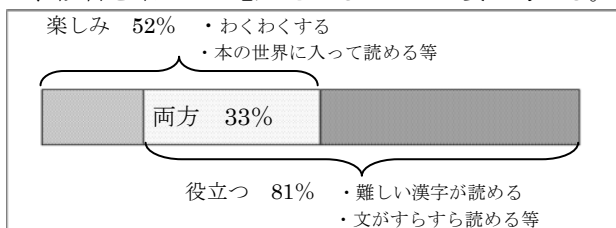
所属校第6学年児童107名と、町立小・中学校教師90名を対象に、読書・国語に関する実態調査を行った。児童への「読書は好きですか」の回答は、「好き」「どちらかという好き」が合わせて86%であった。



第2図 どうしたらもっと読書をするようになりますか

第2図「どうしたらもっと読書をするようになりますか」（複数回答可）には、「読書をするための時間が増える」が69名と最も多い。この回答と「読書は好きですか」の回答との相関関係をみると、読書が「好き」な児童ほど「読書をするための時間が増える」の割合が高く、読書が「どちらかという好き」「どちらかという嫌い」の児童は、時間よりも「本を読む力をつける」や「読書のよさが分かる」の割合が高い。国語の授業では、「本を読む力」と「読書のよさ」に着目した取組が必要と考える。

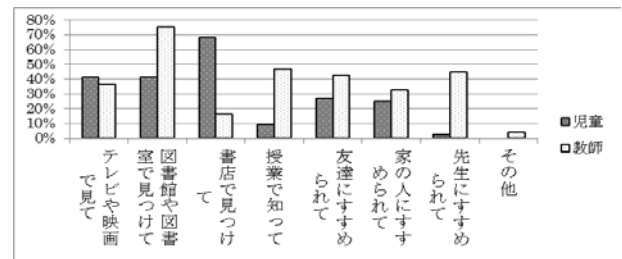
第3図は、「読書のよさは何ですか」の自由記述を分類し、図に表したものである。『役立つ』に分類された回答が81%を占め、『楽しみ』の分類は52%であった。両方を回答した児童は全体の33%で、『役立つ』意識の方が高い。『役立つ』の記述内容をさらに分類すると、「新しい漢字、難しい漢字が読める」「文がすらすら読める」という学習面に関する役立ちと捉えている回答が多かった。このことから、読書が将来や自分の成長に役立つという長期的な視野を持たせること、読書を楽しみと感じさせることが必要と考える。



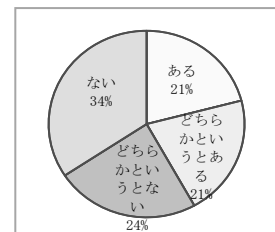
第3図 読書のよさは何ですか

第4図は、児童が読書をするきっかけと、教師が考える児童が読書をするきっかけを示している（複数回答可）。児童の回答は、書店や図書館・図書室、テレビ

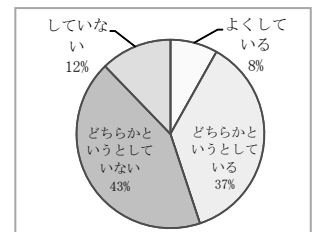
や映画など学習以外での機会が多い。一方、教師が考えるきっかけは、「図書館や図書室で見つけて」に次いで、「授業で知って」「先生にすすめられて」となり、教師側の捉えと実際の児童の回答に認識の差が認められた。第5図では、国語の学習がきっかけで新しい本を読んだ児童は半数に満たない。このことから、授業・教師からの働き掛けを見直す必要があると考える。また第4図から、「友達にすすめられて」は、児童・教師共に高く、きっかけとして意識的に位置づけていくことが有効であると考えられる。



第4図 児童「本を読むきっかけとして多いものは何ですか」  
小学校教師「児童が本を読むきっかけとして考えられるものは何ですか」



第5図 国語の学習がきっかけで、自分で新しい本を読んだことはありますか



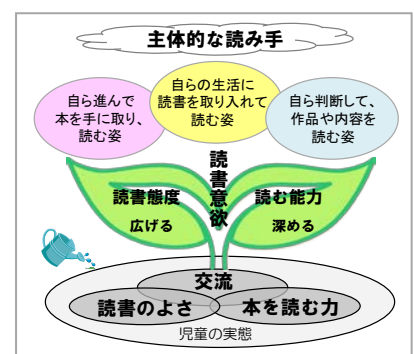
第6図 国語の指導をする際に、読書指導を意識していますか

教師への質問「国語の指導をする際に、読書指導を意識していますか」（第6図）には、どちらかといえども「意識している」は半数以下であった。また読書指導を行う上で、「国語の指導と読書指導の関連が分からない」「読書指導の方法が分からない」「時間がない」が課題として挙げられた。また「読書に関して、小学校で身に付けておきたいこと」として、小学校教師が「読書の楽しさ」、中学校教師が「読書習慣」を多く挙げた。小学校では、国語の授業と関わりを持たせた読書の経験を積み重ねることが必要である。

### 4 研究の構想

第7図は主体的な読み手の育成のイメージ図である。

実態調査から、読書意欲を高めるために、「読書のよさ」「本を読む力」「交流」を国語の授業に取り入れることが重要であると考えられる。



第7図 主体的な読み手の育成

### (1)「読書のよさ」を感じる

読書の目的は、「楽しみ読み」「調べ読み」「考え読み」に分類される(田近 2009)。自由に好きな本を読んだり知ったりすることで、『楽しみ読み』のよさを味わう。本研究では、知識を得たり考えを広げたり深めたりするための「調べ読み」「考え読み」を合わせて捉え、『役立ち読み』と定義する。『役立ち読み』は、今の自分のために読むだけでなく、自分の将来や成長に役立つという長期的な視野を持たせることにつながる。そして、この『楽しみ読み』『役立ち読み』の2つの読書の目的を通して読書の幅を広げ、「読書のよさ」を感じさせることを目指した。

### (2)「本を読む力」を活用する

本研究では「本を読む力」を、「C読むこと」の目標の読む能力と同義とし、読書態度を含むものとした。本研究では、小学校6年間を通し読む能力として学習してきたことを確認し、活用することで読みを深め、国語の学習の有用性や自身の成長と共に、読書へのつながりを感じさせることを目指した。

### (3)友達と「交流」をする

本を読むきっかけとしての交流、作品の読み取りの交流等、友達との「交流」を設定する。読書を個人の楽しみに留まらず、交流を多く設定し、自分との違いやよさに気付き、見方や考え方を深めたり広げたりすることが、読書意欲を高めることにつながると思った。

## 研究の方法

以上の3つの視点を国語の授業に取り入れ、読書意欲を高めることを目指す。国語科における読書活動には、読書単元に代表される読書に親しみ読書習慣を身に付ける読書活動と、文学的な文章を読む単元や説明的な文章を読む単元など、読みの能力や技能の確かな定着を図る読書活動がある(中村 2010)。したがって2つの単元からアプローチすることで、より確かな読書意欲の向上が図られると考える。本研究では、「読書のよさ」を感じるための読書単元についての計画・考察と、小学校6年間で身に付けた「本を読む力」を確認するための文学的文章を読む単元について計画した。なお、「交流」については、各単元に学習活動として入れていく。

また調べ読みなど情報を活用する学習は、説明的な文章を読む単元だけでなく他教科でも行われるが、文学的文章を読む学習は国語科のみで行われるため、取り上げる必要があると考える。

### 1 読書単元「本は友達」

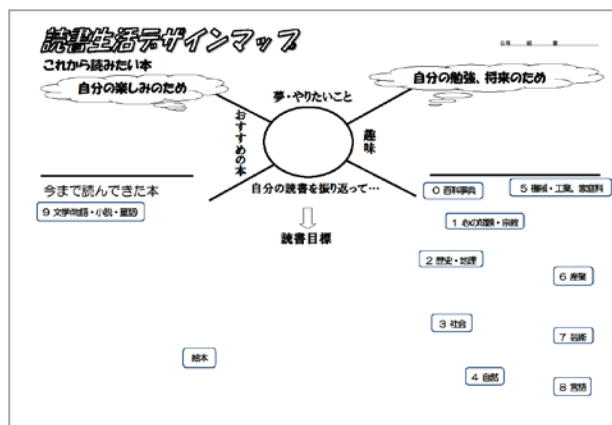
実施期間：平成25年12月16日～12月17日

対象児童：第6学年3学級(105人)

本単元で目指す子どもの姿を、「自ら進んで本を手に取り、読む姿」と「自らの生活に読書を取り入れて読む姿」の2点とした。

### (1)「読書のよさ」を感じさせるための手立て

自らの読書生活を振り返り、本の存在について考える活動である。杉本(2010)は、「読み手が自身の読書生活に目を向け、今までの在り方を振り返り、現状を捉え、これからの読書生活を組み立てていく力」として「読書生活デザイン力」を挙げている。そのことを考え合わせ、第8図「読書生活デザインマップ」を開発した。手立てとして以下の工夫を行った。



第8図 読書生活デザインマップ

## ア 教材の開発

### (7)読書傾向を把握する

「今まで読んできた本」の欄に書名を書いた付せんを貼る。その際、十進分類法を基にジャンルに分けて貼ることで、自分の読書傾向を把握させる。

### (4)「これから読みたい本」を記入する

「これから読みたい本」の欄を設け、読書を楽しむにしたい気持ちや目標を持ち、自ら読書生活を計画(デザイン)しようという意欲を持たせる。

### (4)「読書のよさ」を感じる

「趣味(好きなこと)」と「夢・やりたいこと」の欄を設け、趣味をより深化させたり、夢をより具体化させたりするための手段として読書が自分の将来や成長に役立つという『役立ち読み』の意識付けをする。また改めて読書の意義として、楽しむために読んでいることを認識させる。

### (5)読書の積み重ねを実感する

「これから読みたい本」は異なる色の付せんに記入して貼る。読後には付せんを「今まで読んできた本」の欄に移動し、読書の軌跡を辿れるようにする。また付せんを追加できることで、継続した取組を促し、積み重ねを実感させ、読書生活の充実につなげる。

## イ 交流をする場の工夫

### (7)「おすすめの本」で交流する

心に残っている本や友達に薦めたい本を、写真と共に紹介する欄を設け、友達の読んでいる本に興味を持たせ、交流のきっかけとする。

#### (4)「今まで読んできた本」で交流する

友達から新たな本の紹介を得たり、友達と比べたりして自分の読書傾向をより深く把握させる。

#### (2)「本は友達」の単元構想（全3時間）

##### 第1時【読書生活を振り返る】

料理をするときの料理本や、ゲームの攻略本、漫画等日常の様々な場面で読書が行われていることを知り、読書の認識を広げる。自分と本との関わり方についてグループで交流し、共通点や相違点から自らの読書生活を振り返る意欲を持つ。

##### 第2時【読書生活デザインマップを作る1】

お薦めの本をグループで交流する。読んだ本の書名を書いた付せんを十進分類法を基に読書生活デザインマップに分類して貼り、読書量や傾向を把握する。

##### 第3時【読書生活デザインマップを作る2】

前時に作成した読書生活デザインマップを基に、グループで交流する。「趣味（好きなこと）」と「夢・やりたいこと」を記入し、それらをより深化・拡充したり、具体化したりするための読書目標を立てる。その目標を基に、これから読みたい本を『楽しみ読み』『役立ち読み』の2つの目的から考え、読書生活を計画（デザイン）する。

#### (3)考察

##### ア 自ら進んで本を手に取り、読む姿

##### (7)読書傾向を把握し、自己を見つめ直す

自分の読書傾向を把握することや、それにより自分を見つめ直すこと、友達との交流により刺激を受けることなど、様々な場面から児童は、読書への意欲を高めていった。自ら進んで手に取り、読む姿につながる感想が多く見られた。

##### 児童の感想

- ①マップを作ってどういう本をいっぱい読んでいくか分かったし、次の目標もできました。友達で紹介してくれた本も読んでみようと思います。
- ②自分の読んでいる本の傾向が一目見て分かった。
- ③マップを作って友達のをを見ると、こんなに知らない本がいっぱいあって、興味も本だとわかんないと思ってたけど、興味がどんどんわいてきて、ちょっとびっくりしました。

①は実態調査で読書が「どちらかという嫌い」と回答した児童の感想である。読書を客観的に捉え、友達と交流をしたことが、読んでみようとする意欲につながっている。また②のように読書傾向が分かったと記述した児童が多く、読書生活デザインマップの作成が、メタ認知につながっていると考える。③からは交流により、自己を見つめ直し、読書に対し認識を改めていることが分かる。交流時の発言にも、「これ読みたいんだよ」「それおもしろそう」といった言葉が聞かれ、読みたいと思える本が見付かるなど興味の高まりが読み取れる。

#### (4)課題意識から意欲、行動へつなげる

読書傾向を把握した児童は、現状に安心したり危機

感を持ったりしながら、それぞれ課題を見出していた。読書の課題を通じて、これからの自分は「もっとこうしたい」という、読書を含む自らの目標を掲げ、その意欲が行動につながっていく感想が多く見られた。

##### 児童の感想

- ①友達の話聞いてみると、これおもしろそう！とか、読んでみたい♪という本があったので、今日借りて読んでいます。また友達も私のオススメの本を読んでみたいと言っていたので、貸したいと思います。
- ②作っていて、もっと読書がしたくなった。小説や分厚い本にもチャレンジしたくなった。
- ③新しく読みたい本があったら付せんをはって、読んだら下にはるをやってみたくなくて、楽しみになりました。

①から友達の賛同が、自身が認められているという安心感につながったこと、授業をきっかけに友達と本を貸し借りする様子がかがえる。②のような感想を持つ児童が多かった。十進分類法を基に分類したことが、今まで読んでいないジャンルに目を向け、読書の幅を広げるきっかけとなった。また付せんの移動が可能な形式が、③のように継続して取り組みたいという意欲につながった。

第9図は、1月の朝読書の時間を利用して、授業後の読書生活を反映させたものである。円で囲まれた部分が新たに



第9図 1月実施後の読書生活デザインマップ

行った読書であり、友達との交流で知って読んだ本もあった。冬季休業を挟み、84%の児童が新たな読書を行い、そのうち65%が授業で計画した本を読んでいった。また実態調査で、読書が嫌い・どちらかという嫌いという回答した児童においても、14名中12名が新たな読書を行っていた。国語の授業が日常での読書行為のきっかけとなっていて、これは「自ら本を手に取り、読む姿」に近づいたものと考えられる。

#### イ 自らの生活に読書を取り入れて読む姿

##### 児童の感想

- ①読書は勉強や趣味にピアノにも役立つので、これからも読書したいなと思いました。
- ②将来一人暮らしになったときのためにも、料理の本を見ながら料理を作ってみるのもいいと思いました。
- ③将来の夢に向けても本で勉強できることはたくさんあると思うので、今までよりもっと本を読んでみたいと思いました。
- ④読書というのは、自分自身を変え、未来につなげられる大切なことだということに気付いた。

①は現在の自分に役立てるために読みたいと考え、②は将来の自分のために読むことを意識している。これから読みたい本として、ダンスやスペイン語の本と

いった将来の自分に役立つ本を記入した児童も多く見られた。③④から「読書」の存在を捉え直していることが分かる。読書を自身が成長する方法の一つと捉え、生活に取り入れようとする意識が生まれたと考える。

また1月に朝読書で読んだ本を反映した後の読書生活デザインマップでは、『役立ち読み』で計画した本を、実際に読んだ児童は少なかった。これは『役立ち読み』の具体的な書名が浮かばなかったため、テーマやジャンル名を記すに留まったことが要因の一つと考える。児童の主体的な行動を促すには、学校図書館等との連携を図り、本を直接探すことができる機会を設定したり、インターネットや書店で探す意識を持たせるなど、計画から行動までの段階的な指導や、日常的な働き掛けが必要である。

しかし児童が読書の目的を、『楽しみ読み』と共に、長期的な視野を持った『役立ち読み』と捉えたことは、読書の認識を広げたと言える。それは、今後の読書生活に効果的に影響すると考える。

## 2 文学的文章を読む単元「海の命」

本単元で目指す子どもの姿を、「自ら判断して、作品や内容を読む姿」と「自らの生活に読書を取り入れて読む姿」の2点とした。

### (1) 「本を読む力」を確認し、活用するための手立て

上谷(2005)は「高学年では、それまでに学習してきたさまざまなジャンルの読み方を復習し、定着させたい」「低学年から親しんできた作品を、高学年の視点で取り上げさせたい」(p.167)と述べている。小学校最後の文学的文章を読む単元「海の命」は、人物の生き方を考えることが目標にある。他者の生き方を考えることが、自分の生き方を振り返ることにつながる。ここでの読み取りが、これからの読書を生活に取り入れる際に効果的であり、中学校への橋渡しとして適した教材であると考えられる。

単元の構想には、以下の工夫を行った。

#### ア 「本を読む力」の確認

6年間で身に付けた、「本を読む力」に含まれるあらすじや人物像、情景といった言葉を「学習用語」として整理し、確認する。「本を読む力」を活用する意欲を高めると共に、小学校の学習のまとめを意識させ、「海の命」を読む。学習課題を解決するために、「学習用語」から適した読み方を選択したり、内容を関連付けたりしながら読むことで、学習の有用性を感じさせることを目指した。

#### イ 交流をする場の工夫

交流に主体的に参加するためには、自分の考えを明確に持つことが必要である。叙述に即して自らの考えを構想できるように、ワークシートや付せんを活用する。そして考えを交流し、比較することにより、読みの違いに気付いたり、新たな考えが生まれたりし、作

品を深く読み取る楽しさを感じることを目指した。

### ウ 既習作品の利用

児童にとって親しみがあり、安心して読むことができる既習作品を利用する。学習当時は、一人の人物に感情移入して持っていた感想が、その後の経験や成長から、当時と異なった感想を持つことができると考える。そこで、命や、人間と動物との関わり等、「海の命」と共通点のある既習作品『ごんぎつね』『大造じいさんとガン』を読み返す。読み返すことにより、国語の学習の有用性と、読み返すことの楽しさを感じ、読書意欲を高めることを目指した。

### (2) 「海の命」の単元構想(全7時間)

#### 第1時【「学習用語」を確認し、「海の命」を読む】

6年間で学習した文学的文章の作品の挿絵を提示し、学習したことを振り返りながら「学習用語」の確認をする。「海の命」を読み、感動したところ・もっと深く考えたいところを中心に、感想を付せんに記入する。基本的な設定(時・場所・登場人物等)を確認し、あらすじを一文でまとめる。

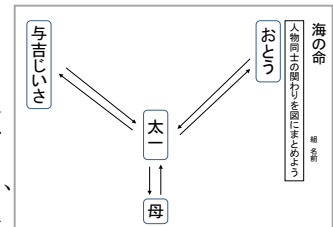
#### 第2時【学習課題を設定し、自分の考えを交流する】

感想を交流し、最も感想が多いと予想される場面に着目する。主人公の見方・考え方が大きく変化する「山場」という用語を学習し、学習課題「なぜ、太一はクエをとらなかつたのか」を設定する。

学習課題に対する今の自分の考えを持ち、交流する。学習課題をスムーズに解決できないことから、全体を通しての読み取りや、登場人物に着目しての読み取りの必要性を感じさせ、次時からの学習に見通しを持つ。

#### 第3時【「人物関係図」を作成し、人物同士の関わりを読み取り、交流する】

人物像が分かる叙述を付せんにまとめ、人物像を読み取る。またそれぞれの人物が太一にとって、どのような存在かを読み取り交流する(第10図)。



第10図 第3時ワークシート

#### 第4時【父と与吉じいさの生き方が太一に与えた影響を読み取り、交流する】

前時のワークシートから、父と与吉じいさの生き方や考え方に関する付せんを選び、本時のワークシートに整理する。太一の生き方に与えた影響

登場人物について	会話	行動	読者の仕方
			おとう
			与吉じいさ

第11図 第4時ワークシート

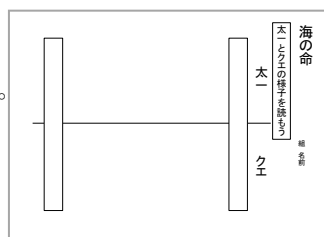
について読み取り、交流する(第11図)。

#### 第5時【山場を読み取り、学習課題について再考する】

山場での太一とクエの様子に関する叙述を付せんにまとめ、時系列でワークシートに整理する。もりを「つき出す」から「足の方にどけ」へ変化する行動と、「泣きそうになりながら」から「ふっとほほえみ」へ変化

する心情に気付き太一の心の葛藤が表れる部分に焦点を当てる(第12図)。

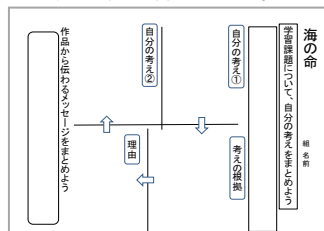
学習課題「なぜ、太一はクエをとらなかったのか」について、第3・4時の学習を踏まえて再考する。



第12図 第5時ワークシート

### 第6時【学習課題について交流し、作品から伝わるメッセージをまとめる】

学習課題について、根拠と理由を明確にして、自分の考えを持ち、交流する。その際、伏線となる叙述と山場を関連付けて読み取れるようにする。



第13図 第6時ワークシート

『海の命』を再読し、作品から伝わるメッセージについて考え、交流する(第13図)。

### 第7時【既習作品を読み返す】

『ごんぎつね』『大造じいさんとガン』から選択し、「山場」や「作品から伝わるメッセージ」を視点に読み返す。読み取ったことを、交流する。また既習作品を学習した当時の感想を紹介し、現在の自分の感想と比べることにより、自身の成長を感じる。

#### (3) 予想される児童の姿

##### ア 自ら判断して、作品や内容を読む姿

自ら判断する場面とは、作品の読み取りの際に叙述を抜き出し、自分の考えや作品から伝わるメッセージをまとめたり、交流したりする場面である。そこで児童は、課題に対して自分が重要と考える叙述や意見を選択し、作品のよさや価値を判断することが予想され、主体的に作品と向かい合うことができると考える。

##### イ 自らの生活に読書を取り入れて読む姿

身に付けた力を確認・活用して「比べ読み」をすることにより、学習したことを他の作品でも活用できることが実感できる。また登場人物の生き方について考える学習は、自己を見つめることにもつながり、読書から何かを得ようとする態度を育て、自らの生活に読書を取り入れることができると考える。

#### 研究のまとめ

読書単元では、読書生活デザインマップで読書生活を振り返り、計画することにより、児童の読書のジャンルや意識の幅を広げ、「読書のよさ」を感じさせることができたかと考える。考察を踏まえ、読書生活デザインマップに新たに「読みかけの棚」の欄を設け、継続した読書の意識を持たせる。また読書単元は、ねらいを明確にして年間指導計画に設定することが重要である。今回は中学校への橋渡しとして、12月に設定し

た。小学校生活最後の1年間を意識させるためには、単元を4月に設定することが効果的である。また教師が、読書生活デザインマップを児童の読書の実態を見取るためのカルテと捉えることにより、一人ひとりに合った本を紹介したり、交流の場を定期的に設けたりするなど、目的に応じた様々な活用の可能性がある。

文学的文章を読む単元「海の命」は単元構想で示した。既習学習を整理し確認することは、本単元だけでなく、学年最初や学年末などで取り入れることが重要である。それにより児童は学習の確認と積み重ねを意識することができる。また既習作品を読み返すことは、読みの深まりや自身の成長を認識し、学習の有用性を感じることから、読書意欲を高めることにつながる。

説明的文章を読む単元においても、文学的文章を読む単元と同様に「本を読む力」があることから、読書へつなげる授業の工夫をする必要があると考える。

#### おわりに

国語科の授業から、主体的な読み手を育てる研究を進めてきた。本について語り合う児童の姿には、楽しい本を紹介したい、知りたいという意欲が感じられた。読書指導は、国語科に留まらず、他教科でも積極的に取り組み、朝読書も学習規律の確立等、副次的な効果だけでなく、読書指導の取組として見直すことが大切である。また学校だけでなく、家庭や地域の協力も不可欠である。これからも児童の読書意欲を高めていく授業の改善を進めていきたい。

#### 引用文献

- 文部科学省 2013 「第3次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/05/\\_icsFiles/afieldfile/2013/05/17/1335078\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/05/_icsFiles/afieldfile/2013/05/17/1335078_01.pdf) (2013.9.1取得))
- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説国語編』『中学校学習指導要領解説国語編』大日本図書
- 上谷順三郎 2005 「読書力・情報活用力を高める授業のために」(光村図書出版『「読むこと」の指導[高学年]一人一人に確かな「読む力」をつけるために』)
- 杉本直美 2010 『自立した読み手が育つ読書生活デザインカー子どもが変わる読書指導』東洋館出版

#### 参考文献

- 田近洵一・井上尚美 2009 『国語教育指導用語辞典』教育出版
- 中村孝一 2010 「国語の授業を二つの読書活動へ繋げる工夫を」(『教育科学/国語教育』9月号)明治図書